

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第6集

山梨県甲府市

飯田一丁目遺跡

1985

山梨県教育委員会
公立学校共済組合

序

飯田一丁目遺跡は甲府市西部、荒川とその支流相川に挟まれた三角地帯の相川寄りに位置しております。たまたまこの地に公立学校共済組合の山梨宿泊所が建設されることとなり、その事前発掘調査を委託された当埋蔵文化財センターが、その調査結果をまとめたのが本報告書であります。

飯田の名は、現在のところ南北朝時代が初見で、戦国時代には甲斐守護武田信虎が駿河今川氏の武将遠江土方城主福島正成を擊破した飯田河原の合戦が有名ですが、付近からは縄文時代や弥生時代の遺物も出土しており、古い時代から人類の足跡を認めることができます。とくに本遺跡の北西方、甲府市湯村・千塚地区には県指定史跡加牟那塚古墳をはじめ、大小の後期古墳が群集しており、その南東面にあたる本遺跡一帯にそれに対応する集落が存在したであろうことは、從前から考えられておりました。恐らくこの状態は次の律令時代に繼承され、『和名抄』にいう巨麻郡青沼郷を形成する集落が発達していたであろうと思います。

ただし、この付近はたび重なる河川の氾濫などによって遺構が破壊され、旧状の復元などはほとんど不可能な状況です。発掘調査の結果も予想どおりで、正確な遺構は確認できませんでしたが、それでも弥生時代から古墳時代を中心に、かなりの遺物が検出され、住居の痕跡の推定から、ひいては集落の形成の可能性をも想定することができました。

近時、朝氣遺跡をはじめ甲府盆地低部の遺跡が注目を受けておりますが、調査はようやく緒についたばかりで、その全貌の解明のためには、今後の資料の蓄積・検討が期待せられております。本報告書も、断片的なものではありますが、そうした資料の一つとして、ご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、ご協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に従事していただいた方に改めて深甚の謝意を表します。

1985年3月31日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磐貝正義

目 次

序

1. 調査に至る経過と概要	1
2. 遺跡の立地と概観	2
(1) 立地と環境	2
(2) 周辺の遺跡	4
(3) 遺跡の層序	5
3. 遺構と遺物	6
(1) 遺構	6
(2) 遺物	6
4. 参考資料	13
5. まとめ	14

挿図目次

第1図 遺跡分布図 ($\frac{1}{2,000}$)	2
第2図 発掘区域図 ($\frac{1}{2,500}$)	3
第3図 基本土層図	5
第4図 調査区遺物出土状況 ($\frac{1}{10}$)	7
第5図 繩文時代の遺物 ($\frac{1}{2}, \frac{1}{2}$)	8
第6図 弥生土器と土師器 ($\frac{1}{2}$)	9
第7図 土師器 ($\frac{1}{2}$)	10
第8図 土師器 ($\frac{1}{2}$)	11
第9図 参考資料 ($\frac{1}{2}$)	13

図版目次

図版 1 (1) 遺跡周辺 (2) 遺跡周辺	
図版 2 (1) 遺跡近景 (2) 遺跡近景	
図版 3 (1) 発掘風景 (2) 発掘風景	
図版 4 (1) 遺物出土状態 (2) 遺物出土状態	
図版 5 (1) 石錐 (2) 磨石 (3) 繩文土器と弥生 土器	
図版 6 土師器	
図版 7 土師器	

例　　言

1. 本書は、山梨県教育委員会が公立学校共済組合より委託を受け実施した、甲府市飯田一丁目2番に所在する、飯田一丁目遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年4月13日から5月4日まで、山梨県埋蔵文化財センターが行なった。
3. 本書は、新津 健、米田明訓、保坂康夫が分担執筆し、その文責を文末に明記した。

1. 調査に至る経過と概要

本遺跡の確認は、昭和51年、ボーリング場建設中に土器が発見されたことに端を発する。これらの土器は、本書に参考資料として掲載されているとおり、弥生時代及び古墳時代のものである。また、本遺跡の北方約500mの県立甲府工業高等学校グランド付近からも該期の土器片が採集されており、この地域一帯が遺跡であることがわかる。これについては、昭和55年刊行された朝氣遺跡報告書（註①）では、弥生時代及び古墳時代の遺物を出す「塙部遺跡」として一括されている。但し、この一帯の原地形については宅地化が進んでいることから不明瞭であり、正確な遺跡数や範囲をつかむには至っていない。いずれにせよ、本報告書第2項で詳細に述べられているとおり、相川等により形成された扇状地上に位置する遺跡の一角が今回の調査対象となった訳である。

今回の調査は、かつて土器の出土したボーリング場跡地への、公立学校共済組合山梨宿泊所建設に伴うものである。公立学校共済組合山梨支部、文化課、埋蔵文化財センターで協議した結果、従来の建物により破壊されていない部分約300坪を中心に調査を実施することとなった。発掘調査は、昭和59年4月13日～5月4日まで、山梨県埋蔵文化財センターにより行なわれたものである。遺跡の名称は、町名により飯田一丁目遺跡とした。

調査は、盛り土及び表土の重機による排土後、発掘区内に一辺4mの方眼を設定し、これを順次掘り下げる方法で行った。その結果古墳時代の土師器を中心に、縄文時代及び弥生時代をも含む遺物が出土した。遺構については、明瞭なものは確認できなかつたがA・B-5・6区にて、同一レベルに括がりのある土器群を検出することができた。この部分に住居等の遺構が所在していた可能性は高い。

（新津）

註① 甲府市教育委員会『朝氣遺跡』1980年

発掘調査関係者

1. 調査担当

文化財主事 新津 健、米田明訓、保坂康夫

2. 調査作業員

池谷富士子、市川貞子、荻野都子、北川原昭子、佐田かね子、名取つる子、平沢則子、福田妙子、福田芳子、森山とき子、山本ふ志枝、渡辺勝矢、渡辺久子

3. 遺物写真

塙原明生（日本写真家協会員）

4. 調査協力者

発掘調査から報告書作製にいたるまで次の方々から御協力、御指導いただいた。記して謝意を表します。

山崎金夫、信藤祐仁、伊藤正幸、平野修、公立学校共済組合山梨支部 平塚邦彦、池田 進

2. 遺跡の立地と概観

(1) 立地と環境

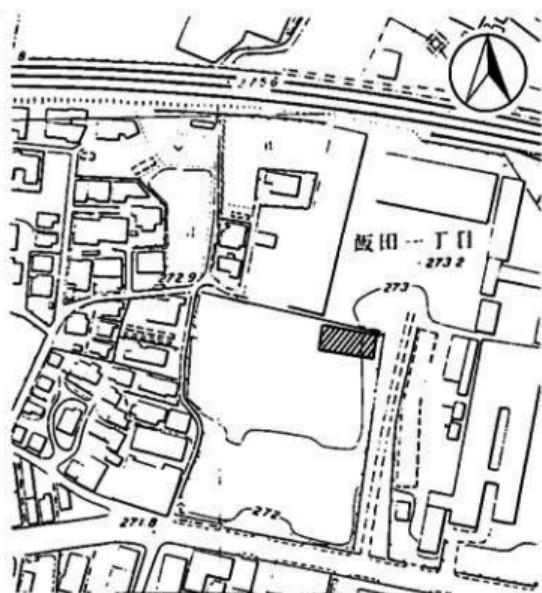
本遺跡は、塩部遺跡の一部である。塩部遺跡は、弥生土器や土師器を出土する遺跡として知られる。塩部から飯田に至る直徑約800mの広大な遺跡である。今回の調査で縄文時代の遺物も確認されたことから、この中に同時代の集落も含んでいることになる。

本遺跡は、現在市街地で、家が建て込み、細かな地形を見取ることはできないが、国土地理院発行の25000分の1地形図をたよりに、大まかな立地条件を見てみよう（第1図）。

本遺跡は、相川の扇状地上に立地すると思われる。背後には、奥秩父山地の南側の山塊がせまる。西方には赤坂台地が、東方には愛宕山があり、コの字形に周辺をかこむ。コの字形の地域の中央に湯村山がせり出しが、この山と荒川橋をむすんだ線が、荒川と相川の扇状地の境界



第1図 遺跡分布図 ($1/25,000$)



第2図 発掘区域図 ($1/5,000$)

とはほぼ一致する。荒川扇状地にくらべ、相川の扇状地は傾斜が急であるが、急傾斜の部分は、愛宕山をまき込むようにしてあり、荒川の扇状地との境界付近は傾斜が非常にゆるやかである。相川の扇状地上に立地する遺跡は、4遺跡あるが、そのうち3遺跡は、傾斜のゆるやかなこの境界付近に立地していて、遺跡立地に非常に適した条件があるものと思われる。

この遺跡立地に有利な条件をいくつかあげることができると、まず、相川の河川に近く、水の便がよかつたことがあげられる。当時の相川がいかに流动していたかを考える直接的な資料を持ち合わせてはいな

いが、遺跡が現在の相川に近接している点からすれば、相川の流路は現在とそう変わりではなく、しかも相川の流れが遺跡立地に重要な意味をもっていたことが予想できる。この地域は、甲府の市街地の南側を東西に連る湧水帯から隔っているので、相川の水は生活のために必要不可欠なものであつただろう。

いかに水の便がよくとも、河川の氾濫がたびたびあるような地域では、遺跡の立地には不利である。しかし、遺跡は一見そうした条件をもつ地域にあるように見える。相川扇状地の遺跡は比較的傾斜の強い地域に立地せず、平坦な地域に立地するものが多い点はすでに述べたが、平坦な地域は、急傾斜地に比べて低地で、水が集まる傾向が強いように思われる。現に、発掘時、水がかなり湧出していたし、土層を見ると砂層と粘土層が互層していて、出水時には冠水しやすい地域であったと思われる。また、この地域の南部で、荒川・相川・貫川の三河川が合流し、河川の流量がかなり多ければ、この地域に逆流してくることさえ考えられる。こうした、立地に不利な条件があるにもかかわらず遺跡は形成されているのである。

こうした点から、遺跡が形成されたことに対するいくつかの条件を考えなければならない。まず、こうした低平な地のなかでも比較的冠水しがたい地域であったことが考えられる。遺物の出土する層は、非常に黒く有機質に富んでいて、土壌化がかなり進んだ土層と思われる。おそらく、その下層の青灰色粘土層が土壌化したものであろう。このことからある時期かなり

安定した地域であったと思われる。

一方、こうした低平な地に立地する必要性を考えなければならない。本遺跡の主体は弥生から古墳時代後期であり、稻作社会の形成と定着にかかわる時代である。おそらく、遺跡周辺に、水田を営むに非常に適した条件がそなわっていたのであろう。先にも述べたとおり、この地域は、出水時に水が逆流し、冠水したものと思われる。そうした水は、この地域に栄養豊富な土をもたらしたに違いない。

このように、出水時に冠水しない安定性と周辺に水田に適した地域があるという相反する2つの条件をおそらくかねそなえた場所であったことが想像できる。

(2) 周辺の遺跡

本遺跡周辺には、縄文時代から平安時代まで連続と遺跡が形成されている。相川、荒川両扇状地を中心とした地域は、遺跡が多く集まり、その周辺の遺跡との関連をみると、1つの遺跡群としてくくれるように見える。この地域は、多くの大小河川の合流する地域であり、それにまつわる地形、土壤の形成された地域として地形的に1つの単位としてくくることもできる。そうした地形、土壤がこの地域に主に分布する弥生時代以後の稻作社会にとって必要不可欠なものであったはずである。この遺跡の単位性と整合するものであると考えられる。

こうしたこの地域の特徴に加え、遺跡の単位性は、地形の時代性という点でいくつかの特徴を指摘できる。縄文時代においては、金の尾、上石田、宝、通光寺の各遺跡のように、かなり低地の部分にまで遺跡がある点である。当時の生業活動を考えるうえで一考を要する遺跡である。

弥生時代の遺跡は、他地域に比して多くが知られている。大半は、荒川、濁川の氾濫原に立地し、初期的な稻作技術に必要な地形、土壤をもとめての立地とも解釈しうる。

古墳時代に入ると遺跡は扇状地上から低地まで広範囲に分布する。最近、善光寺から酒折にかけ遺跡分布調査が行われ、この地域に遺跡が密集することが判明したが、ほとんど古墳時代以後の遺跡である。こうした遺跡群に対応するかのように古墳群が形成されている。千塚あたりから湯村山にかけてに一群があり、愛宕山から横根、桜井さらに春日居町にかけ古墳群がいくつかある。いずれも古墳時代後期のものであるが、前期の古墳は今のところ確認されていない。弥生時代後期に稻作社会が定着し、しかも水田耕作の可能と思われる土地の面積がずいと思われるこの地域に前期古墳が存在しないものならば、大きな特徴として考えるべきである。甲府盆地南縁に展開する前期古墳が、いずれも洪積台地と強い関連をもつ点と考えあわせ、当時の生産基盤を再考する必要性を感じる。

さて、古墳時代後期、その古墳の数からも知られるように、この地域はかなりの人口を擁し、しかもその人口を十分養ううる生産基盤が確保されたものと思われる。また、奈良時代以後、条里制による水田耕地の方形区画が形成されるが、古墳群の南方低地は、甲府盆地内で最も広大な方形区画が復元しうるという。これが全て奈良時代にさかのぼるものとは言ひ切れないが、前述の状況からすれば十分うなづける。こうした状況をみると、古墳時代以後、この地域は経済的に、またそれゆえ政治的に軽視できない地域となつたはずである。春日居町にあったとされ

る国府の立地や、この地域が当時の巨麻郡内にある点などこの地域が政治面で十分に配慮されている可能性を感じざるを得ない（註1）。

(3) 遺跡の層序

次に本遺跡の層序について述べたい（第3図）。土層は、第I層（表土及び擾乱層）、第II層（暗褐色粘質土層）、第III層（黒色粘土層）、第IV層（黄褐色砂層）、第V層（暗褐色砂層）、第VI層（黒褐色粘質土層）、第VII層（青灰色粘土層）である。遺物は第VII層のみから発見された。また、第VI層下半部以下が地下水水面と思われる。

先述したとおり、遺物包含層は腐食に富んだ粘土質の土層であり、おそらく青灰色粘土層の上面が陸化し、人間活動の影響で腐植に富んで第VI層となったのであろう。遺物包含層よりも上位の層は、無遺物の粘土層と砂層の互層であり、再び不安定な地域となったことを反映しているものと思われる。

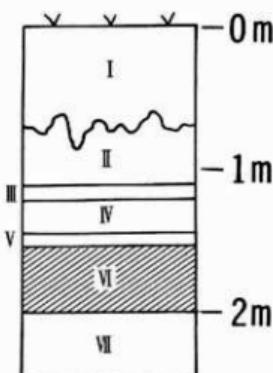
（保坂）

註1・坂本美夫「甲斐の郡（評）都制」

『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・埋蔵文化財センター 1984

・磯貝正義「古代の甲府一青沼・表門二郡を中心として」

『甲府市史研究』創刊号 1984



第3図 基本土層図

土層中の番号は本文中
の土層番号と合致する。



実測風景

3. 遺構と遺物

(1) 遺構 (第4図)

飯田一丁目遺跡では、今回の発掘調査によっては明確な遺構は何一つ確認できなかった。炉・壁・床面・柱穴などの住居址の一部の施設さえも検出できなかったわけである。しかし本遺跡基準層序第Ⅵ層の黒褐色粘質土層からは、古墳時代前期の土器片がある程度偏在的に出土しており、同時代の何らかの遺構の存在を予想させられる。

発掘区の中で土器群はとくに2ヶ所に集中して出土している。1つは、C-2・3グリッドを中心とする区域であり、もう1つはA・B-5グリッドを中心とする区域である。しかし前者のC-2・3の区域では、出土している土器の時期が、古墳時代前期のものと後期のものとが混在しているうえ、土器出土層位直下の第Ⅶ層の青灰色粘土層が、土器の出土している範囲で浅く凹んでいた。つまり、この区域の土器の偏在的傾向は、自然の凹地に土器片が流れ込んだことによって引き起こされたものと考えられよう。他方、後者のA・B-5の区域は出土した土器群の時期もほぼ同様であるうえ、出土レベルも等しく、土器群があたかも住居址床面から出土しているような印象さえもたれた。それ故、これら土器群の下面から住居址床面の一部でも検出できるのではないかと精査したが、発見されなかった。

A・B-5の区域は、かつては住居址が存在した可能性が高いものの、本遺跡の東西を流れる相川・荒川などの河川の度重なる氾濫は、それら存在したかもしれない遺構も含め本遺跡全体の形状を大きく変化させるに充分であったろう。

(2) 遺物

飯田一丁目遺跡では、縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物が出土している。先の遺構に関する項でも触れたが、本遺跡では明確な遺構は何一つ検出されていないため、各時代別で出土遺物の内容を記していく。

1. 縄文時代の遺物 (第5図1~3)

〔土器〕1は深鉢形土器の口縁部である。口唇部は水平に成形されており、L Rの縄文が表面と口唇に施されている。胎土はきめが細かく焼成も良好である。赤褐色を呈する。

〔石鏡〕黒耀石製の有茎石鏡である。

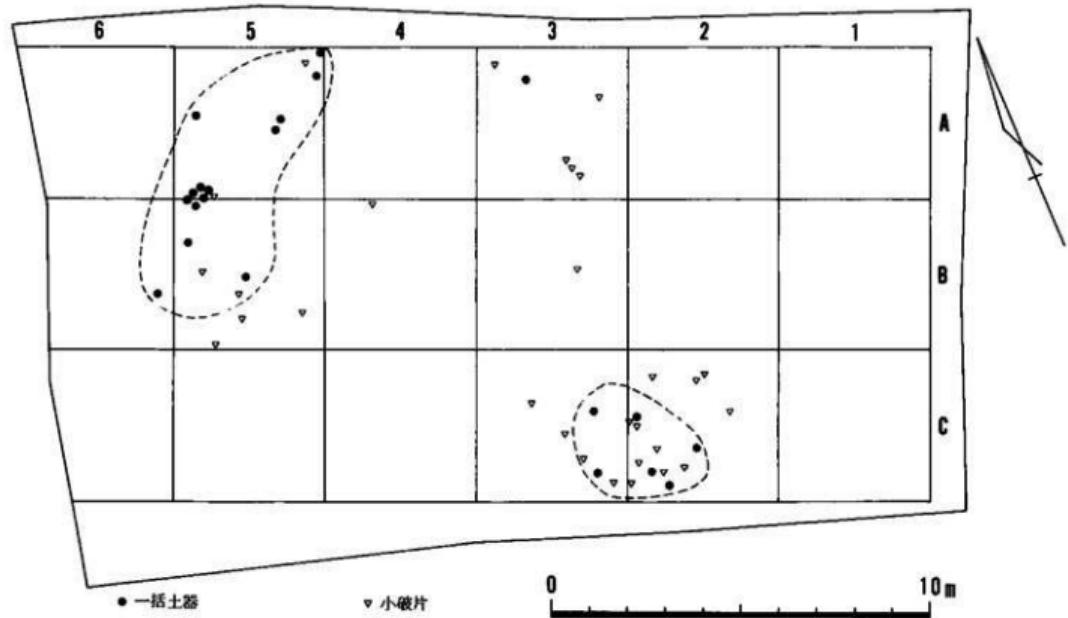
〔すり石〕花崗岩製のもので、わずかに磨った痕跡を3ヶ所とどめるにすぎない。

2. 弥生時代の遺物 (第6図1~21)

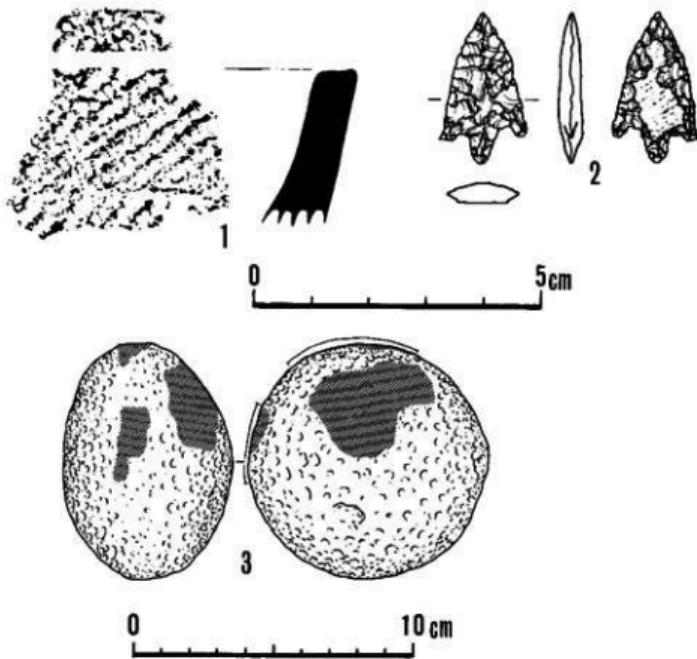
〔壺形土器〕1~19は壺形土器の破片である。

1~17までは全て櫛状の施文具により、体部に波状文が施されている。いわゆる「櫛描波状文」である。18~19は櫛描波状文がないものの、同様な壺の無文部分である。

これらの中でも、口縁部の破片である1~4までの土器は、全てその口唇に体部に波状文を



第4図 調査区遺物出土状況



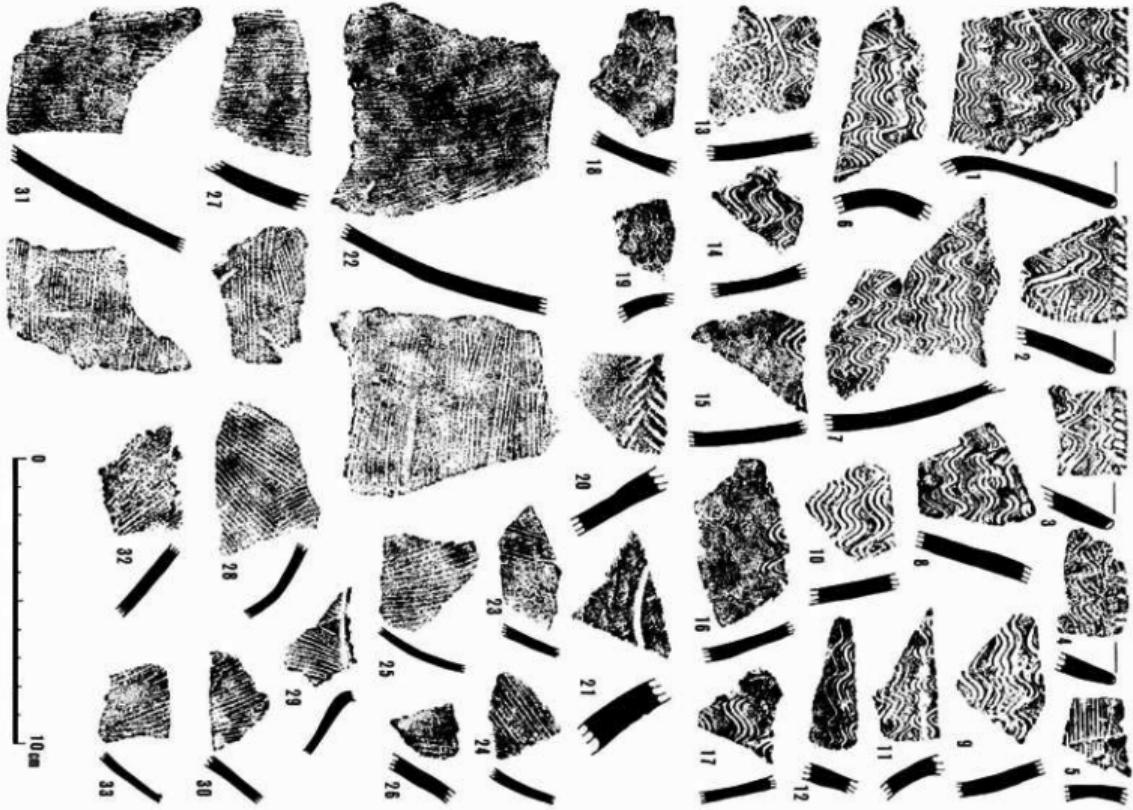
第5図 縄文時代の遺物(1・2, 3, 4)

施したものと同じ施文具で刻み目が施されている。また出土した破片の中で頸部の縦状文がつけられているのは一片だけ(5)である。全ての土器は表面は黒くすすけており、胎土はきめが細かく、色調は灰白色を呈している。焼成も良好であり硬くしまった土器ばかりである。

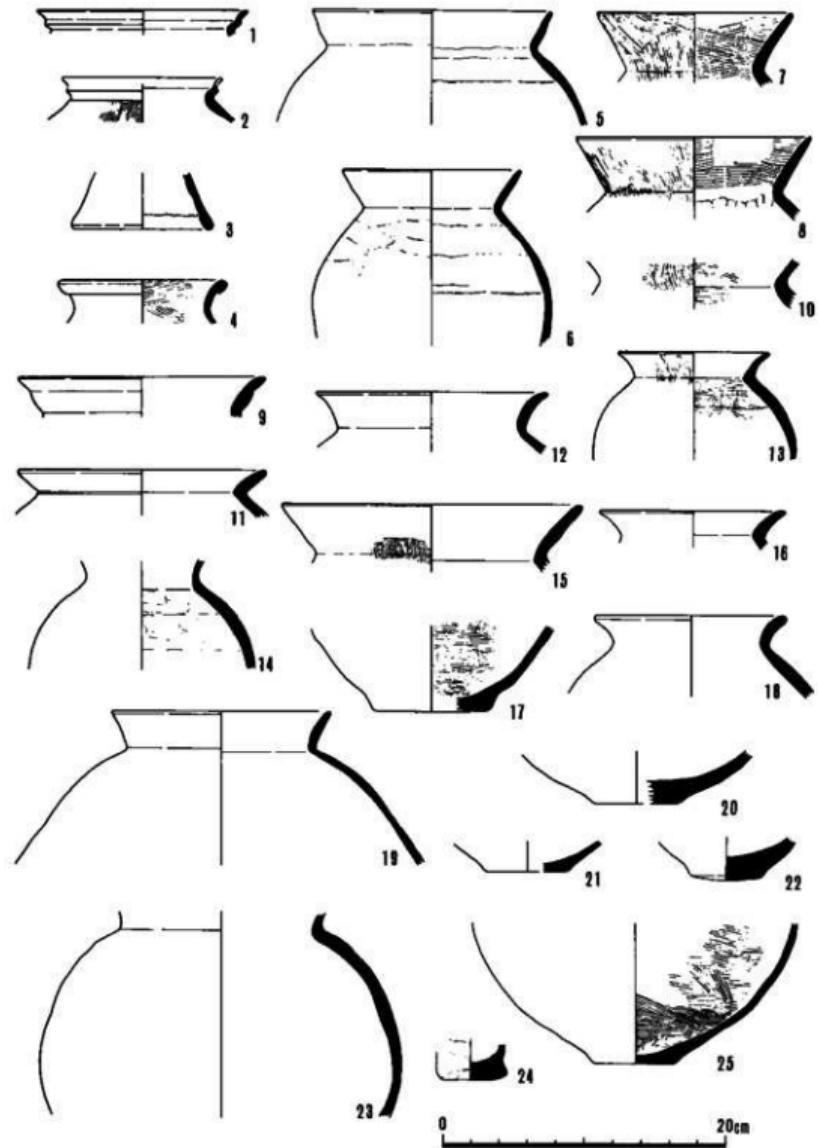
(壺形土器)破片が2点出土している。いずれも肩の部分である。20は櫛状の施文具で綾杉状の文様を横位に施している例で、擬似羽状縄文とさえられるものであろう。表面はかなり摩耗している。21も表面はかなり摩耗しており、文様の残存状態は極めて悪い。沈線が1本横位に走っているように見えるが、これは櫛状の施文具を横方向に連続して押圧したものである。それより以下に、わずかに刷毛目文の痕跡がみられる。なお第8図3の壺の破片は複合口縁の壺の口縁部であるが、口唇にLRの縄文を施し、棒状浮文も2本残存している。弥生時代末のものと思われるが、古墳時代の可能性も捨てきれない。

3. 古墳時代の遺物(第6図22~33、第7図、第8図)

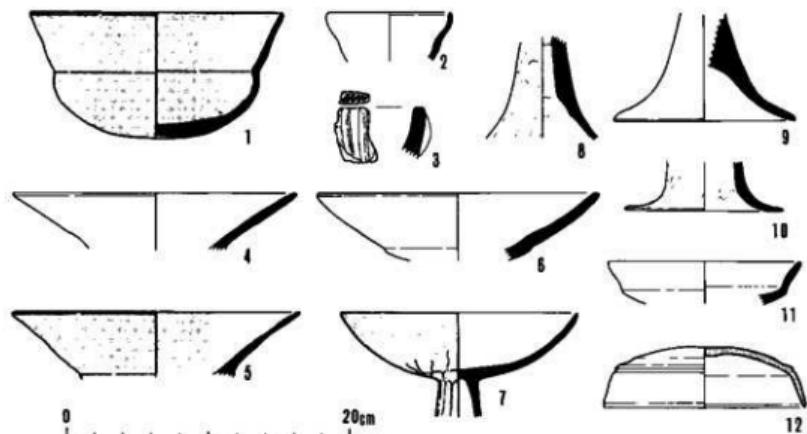
(台付壺)第6図22~33と第7図1~3は、いわゆる「S字状口縁台付壺」である。S字状口縁が残存しているのは第7図1・2だけであるが、他の破片も同様な土器と考えて差しつかえないであろう。体部は刷毛調整されており、底部は内側へ折り込まれる(第7図3)。肩の部分に横位の刷毛目文が付される例は出土品の中には存在していない。外面の刷毛調整は、ほとん



第6図 菩生土器と土師器(ノ)



第7図 土 器 (A)



第8図 土 器 (1)

ど縱方向かそれに近い方向に行なわれているが、内面に調整がなされる場合は横方向・水平方向に行なわれる(第6図22・27・31)。器面は台の部分を除き、全てが黒っぽくすすぐれおり、内面は赤褐色を呈する。胎土は砂を多く含み、焼成は良好である。

(壺形土器)単純口縁のもの(第7図5・6・9・11・12・15・17・20~22・25)と折り返し口縁のもの(第7図4)がある。いずれのものも、小破片からの復元図であり、本来の姿をどこまで表現できているかむづかしいところである。全て胎土は砂が極めて多い。

(壺形土器)全て単純口縁の壺形土器である(第7図7・8・10・13・14・16・18・19・23、第8図2)。これらの土器の中で特徴的な一群は第7図7・8・10の3点である。口縁部の幅が広く、大きく外反する壺形土器である。内外面は刷毛調整されており、色調は赤褐色を呈する。他のものと比較すると若干古い様相を示している。

(壺形土器)第8図1が1個体だけ出土している。内外面共に丹塗りされており棒状のものによって細かく研磨されている。胎土には小石を多量に含むものの、焼成は良好である。

(高杯形土器)第8図4~10が高杯形土器である。5・6は杯下部に縫がみられるが、4も縫があったであろう。4・5は口縁がやや外反し、6はやや内湾する。7は全体にゆるく内湾する杯を有した高杯である。8~10は脚の部分であるが、9だけが極端に土器が厚くなってしまっており、時期的にやや新しい傾向を示している。なお5の内外面と7の外面に丹塗りの痕跡が見られるが、他のものも摩滅が激しく、もともと丹塗りがなされていた可能性も否定できない。

(杯形土器)第8図11は杯形土器であるが、高杯の一例の可能性もある。内外面は赤褐色を呈し胎土・焼成は良好である。

(蓋形土器)第8図12は須恵器の蓋形土器である。上面は回転ヘラ削りがなされており、色調は外面共に青灰色を呈する。胎土には小石を多量に含むものの、焼成は良好である。

〔手捏形土器〕第7図24の1点だけ出土している。口縁部は欠損しているが内外面共に指頭による
ナデを行なっている。

(米田)



発掘風景



土器出土状況

4. 参 考 資 料

第9図に示した5個体の土器は、昭和51年3月に甲府マイボール（現飯田一丁目遺跡）建設中に発見されたものである。遺構の有無や出土状態など詳細は不明であるが、当時、県文化課に勤務していた山崎金夫氏がそれらの土器を実測しておられた。今回その図面を提供していただき、発表の機会を得たわけである。山崎氏には感謝の意を表したい。

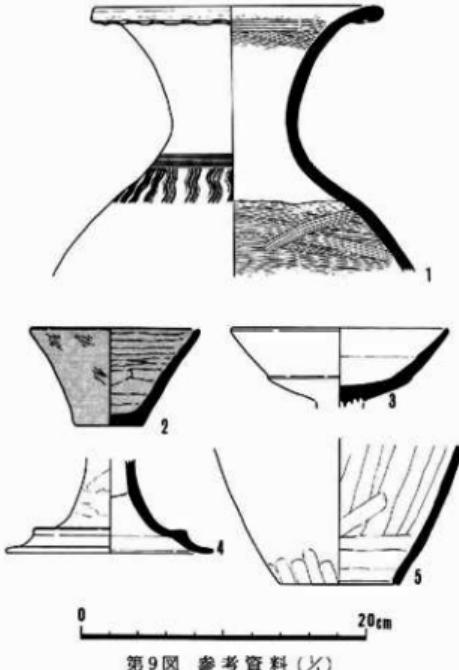
出土した土器群は弥生時代後期・古墳時代前期・後期のもので、今回の飯田一丁目遺跡の調査で出土した土器と、時代は完全に一致している。

1は弥生時代の壺形土器である。器面は風化が激しくザラザラしており、胎土には細かい砂粒を含む。色調は黄褐色を呈する。口縁は折り返し口縁で、下方に指頭によると思われる押圧文が施されている。頸部には櫛齒状施文具（5単位）で横位の沈線文がめぐり、その下に同じ施文具で縦位に波状文が短かく垂下している。しかし5単位全てが明瞭には残っていない。外面無文部分は横ナデ調整されている。内面は部分的に刷毛調整痕が残っているが、他の部分はナデで消されている。

2も弥生時代の鉢形土器である。内外面共に丹塗りされている。胎土には細かい砂粒を含んでいる。表面は刷毛調整のあとにナデが行なわれており、わずかに刷毛目が残るだけである。内面はヘラで粗雑に調整されている。底部には木葉痕が残る。1と2は共に弥生時代後期のものと思われる。

3と4は古墳時代前期の高杯形土器である。それぞれ別個体と思われる。3は内外面共に赤褐色を呈し、ナデ調整がなされている。胎土はきめ細かく焼成は良好。4は黄褐色を呈しており、やはり胎土はきめが細かく砂粒も少ない。外面はナデ調整されており、全体によく整形されている。

5は古墳時代後期の瓶形土器である。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。外面底部付近はヘラ削り、内面はヘラでナデが行なわれている。（米田）



第9図 参考資料 (1)

5. まとめ

甲府市及びその周辺の平坦地域は宅地化が進んでおり、耕地として残されている部分も主に水田として利用されているため、表面採集の方法では遺跡の所在確認は難かしい。しかし、上石田遺跡や朝氣遺跡の例からもわかるように、河川により形成された自然堤防上あるいは微高地帯に各時期に亘る集落が営まれていたことは確かである。今回調査の行なわれた飯田一丁目遺跡もこうした立地に形成された遺跡の1つである。出土遺物からみて、古墳時代前期から後期を中心とした遺跡と見なされるが、今回の調査区にて明瞭な遺構を確認することは出来なかつた。しかし、古墳時代前期の住居の痕跡が覗われるような土器の出土状況を認めることは出来た。このことから、かつて居住地域が河川の氾濫等により相当の影響を被ったことが考えられる。これは、遺物と層位との関係からも指摘できる。遺物を含むのは主にⅡ層の黒褐色粘質土層であり、これより上層には無遺物の粘土層と砂層との互層が観察されたが、これも水による影響を物語るものであろう。いずれにせよ、この地に古墳時代の集落が営まれていたことは確実であろうし、弥生時代や縄文時代の遺物も僅かながら出土していることから、更に遙か時代の集落も形成されていたことであろう。但し、これら集落の規模や性格については、僅かな部分の調査が行なわれたのにすぎず、今後の調査に依らねばならない。

ところで、本遺跡の北西方約2kmには、後期古墳の群在する湯村・千塚地区がある。これらにかかる集落址の調査例は從来知られていない。今回の調査では、僅かであるが該期の遺物も出土しており、古墳群の南東面に亘る地域にそれらとかかわりのある集落が形成されていた可能性は高いと言えよう。

一方、弥生時代の土器では、櫛描波状文や疑似縄文の施された破片が出土している。前者については、敷島町金の尾遺跡に顕著であり、疑似縄文土器についても、金の尾遺跡を始めとし、甲西町住吉遺跡等にも認められる。これらの土器の甲府盆地内における拡がりや、弥生集落のあり方も今後問題となろう。

いずれにせよ、近年、朝氣遺跡を始めとして甲府盆地内の低い部分に位置する遺跡の調査が注目され出したが、かような地域での調査はまだ緒についたばかりであり、環境の復元や生業のあり方も含め、今後の資料の蓄積、検討に期待される点は大である。こうした中で、断片的なものではあるが今次の調査の成果も1つの資料となれば幸いである。（新津、米田、保坂）

主要参考文献

- ・甲府市教育委員会『上石田遺跡』1973年
- ・甲府市教育委員会『朝氣遺跡』1980年
- ・甲斐古墳調査会『甲府北東部に於ける積石塚、横穴式古墳の調査』1974年
- ・末木 健・他「山梨県敷島町金の尾遺跡調査略報」『長野県考古学会誌』36、1980年
- ・甲西町教育委員会『住吉遺跡』1982年

図 版



(1) 遺跡周辺



(2) 遺跡周辺

図版 2



(1) 遺 跡 近 景



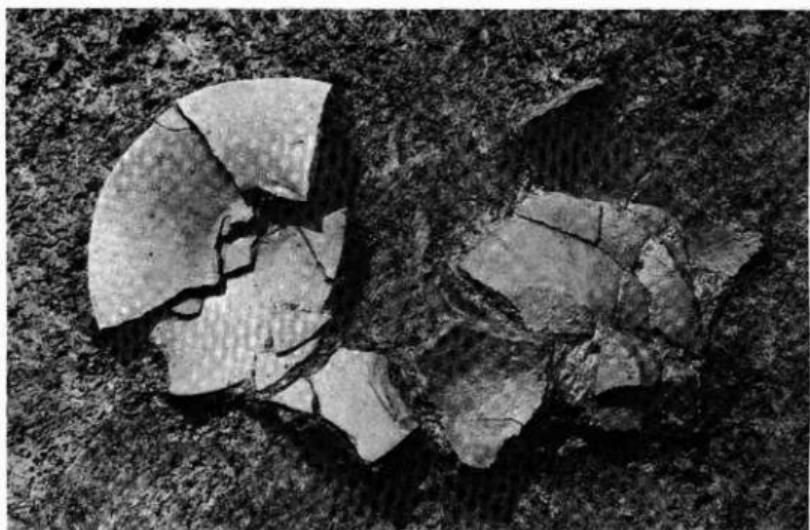
(2) 遺 跡 近 景



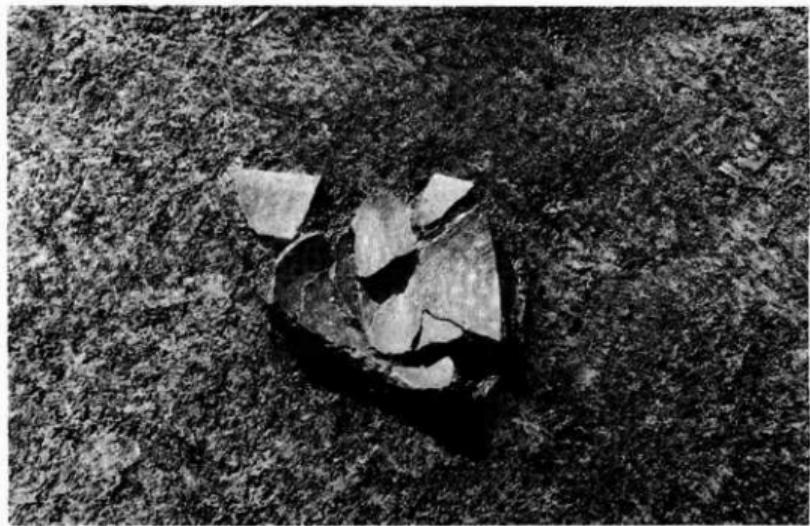
(1) 発掘風景



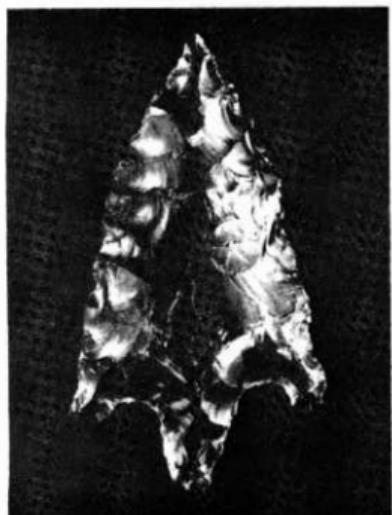
(2) 発掘風景



(1) 遺物出土状態



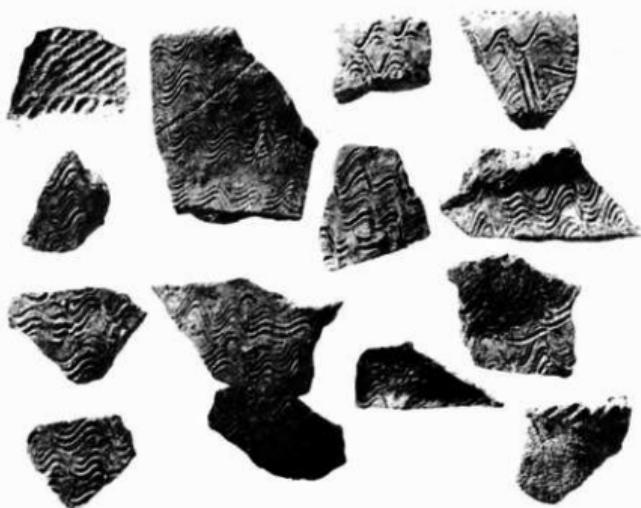
(2) 遺物出土状態



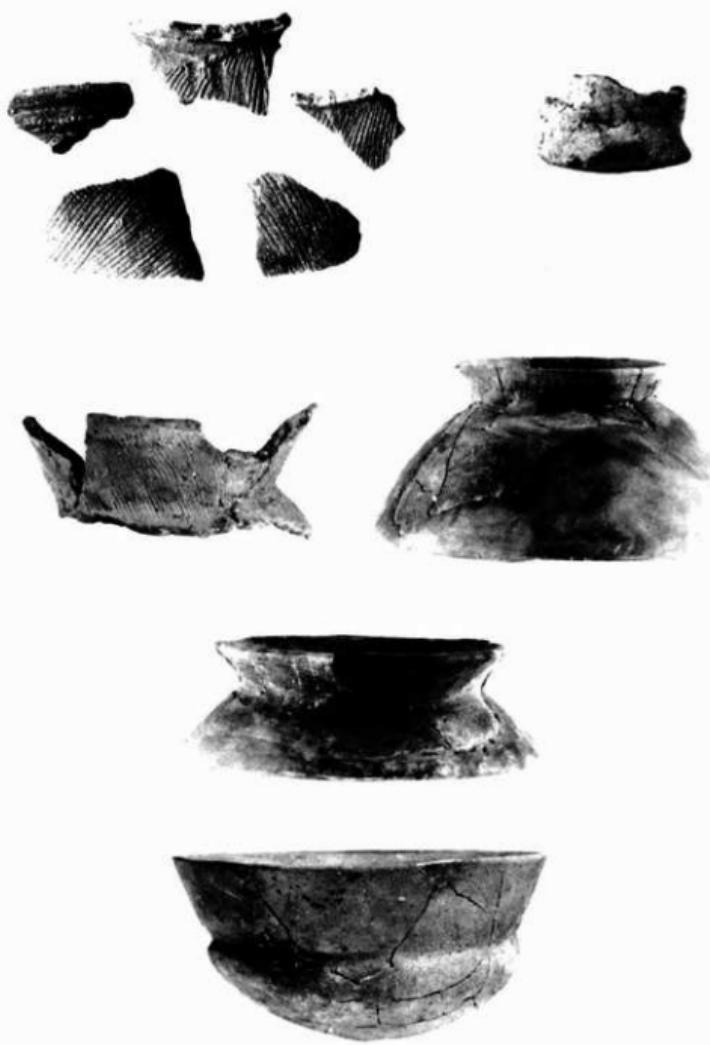
(1) 石 錐



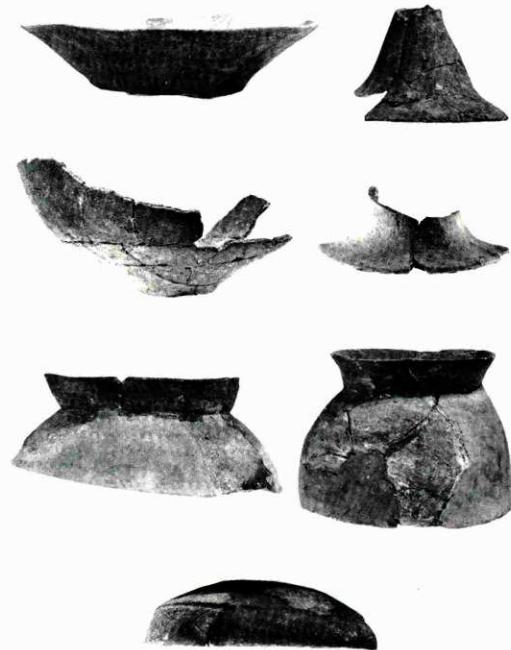
(2) 磨 石



(3) 繩文土器と弥生土器



土師器



土 师 器

昭和60年3月20日 印刷
昭和60年3月20日 発行

山梨県甲府市
飯田一丁目遺跡

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第6集
発行 山梨県教育委員会
公立学校共済組合
印刷所 合資会社ヨキヤ印刷

